

支那古代史と占星術

飯島忠夫

史官と占星術　支那に於ける「史」という言葉の本義は記録の官職ということである。正史の祖と呼ばれる所の史記は即ち史官の記録という意味である。これは本は太史公書と称してあったもので、史官の長たる太史の職に在った司馬遷が其の著者であることは最も確に其の事実を証明するものである。元來史記という名称は特殊の書物に附せられたものではなく、一般に史官の記録を示して居たものであったが、終つひに太史公書によって独占される様になったのである。其の後に至つて、記録其物もまた単に史と称せられるに至つたのである。史は記録の官職であると同時に天文暦日及び其の吉凶の判断等のことをも掌るものである。即ち占星術者である。それ故に「史記」という語は占星術者の記録という意味にも解することが出来るものである。即ち占星術と占星術　支那の歴史が最初占星術者の手によって發達したものであることは、古代の歴史が常に天文学的占星術的記事を織込まれて居ることによつても知られる。上古史の資料で、史記の基礎となつたものは第一に書経である。それは第一篇の堯典から既に天文学的占星術的記事に満たされて居る。書経には全篇を統一する一種の思想が有るが、其の中心点と認めらるべき篇は即ち洪範である。そこには五行即ち水火木金土ということがあり、五紀即ち歳、日、月、星辰、曆数ということが有り、風を好む星とか雨を好む星と

かいうことなどが有り、王者は深く天文について注意すべきことを述べて有る。第二は春秋である。そこには周の王室及び諸侯の間の会盟や戦争や結婚や其他の各種の人事上の重要な記事と共に、日食、彗星、地震などの天変地異が丁寧に記載されて一々月日が記され、日には干支が当ててある。また歴代の正史の志類の順序は天文志、律歴志が其初となつて居る。此の如き事實は、支那歴史を研究しようとする者が、決して占星術の方面を閑却すべきものでないことを示して居るものである。

占星術と淮南子　支那の占星術は即ち「天文」の学である。それが如何なる組織を有するものであるかということ、史記の天官書や、歴書や、漢書以下の正史の中にある天文志や律歴志や五行志や、又淮南子の天文訓や時則訓などによつて、其の大体を知ることが出来るのである。淮南子史記よりも古い材料としては最早何等の纏まったものがない。淮南子は、漢の武帝の時代の初の頃に淮南王劉安が多くの学者を集めて編纂した所の、一種の百科全書の様なもので、古来伝承した各方面の智識を網羅することに努めて居るものであるから、上古の占星術の内容は先ず此の書を主として研究するのが宜しいのである。

占星術は原始的科學　占星術というものは、今の科學の眼から見るときは全く迷信の結晶で、殆ど何等の価値も無いもの様である。しかしそれは其時代の哲学と實際の經驗とを基礎として構成したもので、原始的科學又は擬似科學とも名けることが出来、人類の智識の發達の一段階として、一の重要な時代を劃すべきものである。それは人類が原始社会の生活から脱出して、始めて文明社会に進み入つた時の産物である。原始社会に於ける信仰や宗教的儀礼や療病禁厭の法や其他の風俗習慣の研究ということが、人類の發達史を考ふる為に決して忽にすべきものでないとすれば、此の初期の文明社会に於ける學術の研究も、また其重要な

る程度に於て、決して原始社会のものに比して優るとも劣ることはない筈のものである。

古代文明諸国の占星術

占星術というものは支那の上代に有るばかりでなく、バビロンにもエジプトにも、ギリシヤにも、印度にも、上代からしてすべて行われたものであつて、支那の占星術が現代に於ける我が国民生活の根柢に深く喰い込んで居る様に、バビロン・ギリシヤの占星術は今でも種々の新味を加えて、欧米の諸国に其の流伝を絶たないのである。近年逝去した米国の学者モーリス・ジャストローはバビロン・アッシリアの占星術を深く研究した人であるが、其の言葉に「吾人が古代に於ける此の無意味の学問を研究する為に多くの脳漿を費したのは、古の人が如何に無意味のことを工夫する為に日を費したかを知る為である」という様な意味のことが有る。しかし占星術というものは、たとい其事柄が無意味であつても、其奥には天道天則に対する深い畏敬の觀念が含まれて居る。それは決して単なる遊戯ではない。初めて文明社会の状態に入り込んだ人類の真面目な精神生活を知るといふことは其れ自身に於て大に意義の有ることと言わねばならぬ。それ故に支那の占星術を理解するといふことは支那歴史の研究の為のみならず、尚進んで支那民族の発達乃至東洋文化の起原を知る為にも最も重要なことである。

占星術の大前提

支那の占星術の大前提となるものは宇宙生成論である。それは淮南子天文訓の冒頭に於て最も詳に記載されて居る。其の大意は次の如くである。

「天地の分化しない以前は渾沌たる状態であつたが、それが分れて、軽いものが天となり、重いものが地となった。天は陽性の気であり、地は陰性の気であつて、二つの気が相互作用し、相抱合して、万物を創造する。陽氣の精は日となり、陰氣の精は月となり、日月から溢れ出た精は星となつて、此等の精は

皆天に属する。天に在る物と地に在る物とは互に相影響して、一方に或る変化が起れば、他方にも必ず其れに対応するところの或る変化が生ずる。人間界の主たる天子の施行する政治の善悪は常に天に通じ、天の現象に変化を与えて、人類の生活に吉凶の結果を生ずる。

太一陰陽五行　此の天地の根原たる一気は即ち太一と呼ばれるもので、それから陰陽の二気に分化し、陰陽から更に五行が出る。陰陽の精は月と日とで、五行の精は日月から溢れ出たところの五星である。五星は木火土金水の五個の惑星で、それは肉眼で見られる惑星の全部である。此の太一陰陽五行の作用によって、万物が造り出されるのであって、天地人の三界に於ける変化が互に相對応して居るのは即ち此の理に本づくのである。所謂陰陽五行説は即ち支那占星術の根本である。

曆法の成立　天に於ける日月五星が恒星の間を縫って運行し、其れ等の間に離合集散の現象を生ずるのは、即ち陰陽五行のそれぞれの作用が種々に結合する状態を標示するものである。それが地上に於ける各種の變化と相對應し、天子の政治の善悪と相照応して、吉凶禍福の結果を齎すべきものであるから、此等の天体の運行は最も精密に注意されねばならぬ。茲に曆法成立の基礎が有る。曆法は即ち日月五星の運行の規則を發見して、計算によつて其の将来に於ける状態を予知する為のものである。其れ故に陰陽五行説と天文曆法とは占星術の二つの重要な部門となるのである。

支那の曆法　支那の曆法は、書經の堯典に「曆三百有六旬有六日。以二閏月一定二四時一成レ歲」とあるのが、其最も古い記載である。閏月を設けるのは即ち所謂太陰曆であつて、詳言すれば、太陰太陽曆である。曆法は上古から段々に繼承されて来たので、古曆の組織は、淮南子の天文訓、史記の曆書、漢書以下の律曆志にあ

る記載を綜合して、其の大体を了解し得られる。それは、日が恒星の間を經過して元の位置に還る間、即ち一年の日数を三百六十五日四分の一とし、月が朔から満月となり、更に朔に至るまでの間の日数を二十九日九百四十分の四百九十九とし、木星が天を一週する間を十二年としてあるものである。其の他の四星の週期は余り重要ではないから、今は略して置く。さてそれらの週期を計算する為に取る所の基点は、朔の時刻と冬至の時刻とが、夜半に於て結合する時、即ち夜半朔旦冬至さくたんとうじと称する点であつて、十九年毎に朔旦冬至が繰返され其間に二百三十五月があつて、其の中に七個の閏月が置かれ（これを十九年七閏という）それが四回重なつて七十六年即ち九百四十月を経れば、更に夜半朔旦冬至の現象を生ずることとなるものである。一年の日数を書経に三百六十六日としてあるのは、三百六十五日四分の一の概数を取つたものであるうと思われる。

木星の週期と十二辰 木星の週期が七十六年に結合される方法は甚だ複雑である。それには木星の反映なる太陰と称するものを設ける。太陰は一定の点から木星と分れて反対の方向を取り、同一の速度で天を一周するもので、これは天神の中で最も尊貴なるものである。太陰が一年毎に經過する区域によつて天周を十二区に分けて、之を十二辰と呼ぶ。十二辰の初は寅いんであつて、それから卯辰巳午未申酉戌亥子丑を経て復び寅に還るのである。太陰の運行を子から数え始めるのは前漢の末頃からのことである。木星は古くは歳星と呼ばれて居り、太陰は又蒼龍・歳陰・太歳とも称せられ、後には太歳とのみ呼ばれる様になつた。年を歳といふことは元來木星から導かれた名である。

十干十二支 十二辰に十日というものが組合わされて六十種の組合せが成立つ。十日というのは甲乙丙丁戊己庚辛壬癸ぼきごうのことで、これは十進法によつて日を数えたことから起つたものであるう。十日十二辰は後漢

の頃から十干十二支と呼ばれる様になった。それは班固の白虎通びやくつうに始めて見える。干支とは幹と枝ということである。十干十二支の個々の名称は何れも発生・繁茂・成熟・伏蔵を示して居るもので、それは語原から推しても、文字の構成から推しても知られるのである。そこには陰陽の理法と五行の推移する順序とが示されて居るのである。十干十二支の名称は即ち陰陽五行説の適用されたものと推定される。

歲月日時の干支 干支の六十の組合せは歳に附せられ、其の吉凶を標示すると共に月にも日にも附せられる。時刻にはただ十二支のみが附せられて居るが、これも遙に後世に至ってはやはり十干と結合して居る。

古曆の曆元 最古の曆法に於ては歲月日時に十干十二支を附した基点は西紀前四九二六年の春正月朔旦立春の日である。それは甲寅歳、甲寅月、甲寅の日で、日の初をば寅の刻とする。寅の初刻は今の午前三時である。甲も寅も共に発生の意味を有する言葉で、十干の初と十二支の初とに当るものである。此の年から四千五百六十年を経過すれば、再び甲寅歳正月朔旦立春甲寅となるのである。此の年は西紀前三六六に當つて居る。日に附加した干支は今日まで一日の間断も無く続いて居るのであつて、更に又幾万年の昔までも溯つて附加し得るのである。歳の干支は前漢の半ば以後の頃から一年づつ前に繰上げられることになつて、それが現今まで継承されて居るのである。

十二次 十二辰は木星の運行する方向と反対した順序になつて居るが、それを木星の運行する方向に順つて推して行くときは、其儘十二次と称するものとなる。十二次の初は星紀と呼ばれ、それからげんきよう玄枵、しゅし娵訾、こうろう降婁、じゆんしゆ大梁、じゆんしゆ実沈、じゆんか鶉首、じゆんか鶉火、じゆんび鶉尾、じゆんか寿星、じゆんか大火、じゆんか析木を経て又星紀に還るのである。星紀の中央は冬至点即ち冬至の日に太陽が居る点であつて、星紀の初点は木星が其反映であるところの太陰と分れる点としてある所

ある。暦の計算の基点は即ち日と月とが共に星紀の中央に居り、且つ五星が其の初点に集合して居ると想定した時である。此の十二次は本来一年に約十二個月が有ることに本づいて、天周を十二等分したものであるが、十二辰は之に木星の神靈なる太陰の運行を加味して一転化を行ったものである。

二十八宿 次にまた月が二十七夜余で天周を一巡して元の位置に還ることからして、天周を二十八の区劃に分ける。其の区劃の初点もまた冬至点である。これを二十八宿と名づける。其の順序は十二次の順序と同じ方向を取る。此等の区劃を設けるのは日月五星の運行を追跡して其の位置を測定する為の目標が必要であるからである。此の如くして暦法が成立するのである。暦法が成立してからは、未来に於ける一定の年月日時に於て日月五星の占める位置を予測することが出来るのであつて、日月五星の占める宿次によつて、其の年月日時の吉凶が定められるのである。其の年月日時にはまた陰陽五行の哲学を適用した十干十二支が常に附せられて居る。

暦法成立の年代 暦法や干支の成立した年代については、史記の曆書に「黄帝（流布本には皇帝とあるが、一本には黄帝として居るのがある）考定星曆、建立五行、起消息、正閏余（中略）顓頊受之」とあり、呂氏春秋には「大撓作甲子」とあつて、又大撓は黄帝の師であつたと記してある。これは即ち黄帝の時代に暦法が創立され之に伴つて干支が出来たことを示して居るものである。漢書律曆志に拠れば、漢代までの間に知られて居る古代の暦法は黄帝曆、顓頊曆、夏曆、殷曆、周曆、魯曆の六種であるが、此等のものは何れも同一の週期を用いるもので、ただ元始の点の定め方に、それぞれ特色が有るだけである。しかし此等の起原については、多分の伝説分子を含んで居るものであるから、真の成立年代を決定するには充分の批判を加える

必要があるのである。

上古史の年代の批判 曆法が成立すれば、限りなき未来を予測することが出来ると共に、限りなき過去をも知ることが出来るのである。上古史の年代は此の如くして算出されたのである。これは占星術と歴史との間に密接の關係があることの一例として、自分が特に茲に述べて見たいと思うところのものである。史記の三代世表の序には、

余読_レ諜記_一、黃帝以來、皆有_二年數_一。稽_二其歷譜_一、終始五德之傳、古文咸不_レ同乖異。夫子之弗_レ論_二次其年月_一、豈虛哉。

とあつて、年表としてはただ周の共和元年(B.C. 841)以後を記し、其以前は世表としてある。司馬遷は太史の官職に居たけれども、陰陽五行説の絡み附いた曆法から推算した太古の年代には信を置かなかつたのである。司馬遷の時代の頃に唱えられて居た太古の年代については、漢書律曆志に種々なる記事が有る。其の中で殷の時代の初の方で、湯王の次に立つた太甲の元年を西紀前一五六七に置いてあるのは、前漢の中頃から唱えられと思われる殷曆で言う所のもので、此の年は此の曆法の計算の基点として用いられた甲子朔旦冬至を含むものである。これは一見して曆術家の仮託である事が知られる。又漢書律曆志に黃帝より以來元鳳三年(B.C. 77)まで六千余歳とあるは、此の一五六七の上に彼の大週期なる四千五百六十年を加えたものと推測されるのであつて、それは西紀前六千二百二十七年を指したものとかわると思われ。

同上の續 又黃帝以來元鳳三年まで三千六百二十九歳という説も見えて居る。黃帝曆と稱するものは四種有るといふことであるが、これは其中の一に屬するものであろう。曆法の創立者は上述の通り黃帝であるが、

此の黄色の帝ということは、五行の土を神格化したものと同名であるから、曆法と五行説とが初から提携して居たことは此の点からしても考えられるのであつて、黄帝は五行説に本づいて造られた太古の神様であると思われるのである。漢書律歴志の中の世経にはまた夏の禹王の即位を西紀前二一八三に当る年とし、殷の湯王が桀を伐つた年を西紀前一七五一に当る年とし、従つて殷の太甲の即位を西紀前一七三八に当る年とし、周の武王が殷の紂王を亡ぼした年を西紀前一一二二に当る年として居る。此等は計算から出した木星の位置に占星術的価値を附して、建国の年を作製したのに外ならぬ。即ち伐桀の年には木星が大火の宿次に居り、伐紂の年には木星は鶉火の宿次に居る。これらはそれぞれ殷と周との分野である。分野ということは天の十二次を地上の諸国に配当して置くもので、木星が宿る所を分野として居る国は、其時の戦争に必ず勝利を得るとしてあることから起つた説話である。上古の年代は即ち一種の神話であつて、年代学と神話学とは茲に一種の奇妙なる提携を為して居るものと言つても宜しい。現分普通に用いられて居る上古史の紀年は、宋の時代に邵康節の著した皇極經世書の中にあるもので、それを通鑑前篇に採用したことから始まつて居るものである。それはやはり一種の占星術の応用であつて、黄帝の即位を西紀前二六九八とし、堯の即位を西紀前三五七とし、禹の即位を西紀前二二〇五とし、湯の即位を西紀前一七六六とし、武王の即位を西紀前一一二二として居る。此等は後世の製作であるから、勿論信ずるには足らぬのであるが、漢書に有るものでも同様に信ずべき価値の無いことは明瞭である。若し此等を信ずるならば司馬遷の笑を免れぬであろう。竹書紀年にある上古の年代はまた全く異つて居るが、これも信ずべき価値の無いものである。此の書に記録してある年の干支は、すべて前漢の中世以後の方法即ち現行の方法に拠つて居るもので、其以前のものよりは一年ず

つ繰上げられて居る。これは其書の発見されたのが西晋の時代であるから、発見後に於て整理せられる際に、年の干支が附加されたであろうと推測する人も有るであろうが、それも証拠の無い事である。

占星術成立の真年代

支那上古史の年代が占星術の応用によつて作為されたものとすれば、其の占星術の成立した年代が何れの頃であつたかといふことは頗る重要な問題となるのである。然らば支那の暦法の組織され、従つて占星術の完成された年代の真実のものは果して如何なる頃であつたであろうか。熟ら考えて見れば、それは天度分割の基礎となつて居る所の冬至点の測定された年代と、暦法の根拠となる日月の観測が行われた年代と、又十二辰の順次に運行する太陰の行動を規定する所の木星の運行が観測された年代とを主要なる根拠として推定し得べきものである。何となれば、第一に、冬至点は歳差の理法によつて、約七十二年間に一度ずつの割合で移動して居るのに、古暦ではそれを牽牛の初点即ち ♉ Capricorn の附近に固定させて置くから、其の観測は冬至点が此の星の附近に在つた年代に行われたものと考えられるからである。第二に、暦法で用いる一年及び一月の日数が真正のものより多少の超過があつて、此の差が積るときは約三百年に朔が一日後れ、約百三十年に冬至が一日後れることとなるから、曆面上の朔と冬至とが真の朔と冬至とに最もよく一致する年代を以て実際の観測が行われた年代と推定し得るからである。第三に、木星の真の週期は十一年八六であるから、仮設の十二年の週期との齟齬が段々積つて約八十五年毎に木星の真の所在が曆面上の所在よりも一次ずつ先へ進み出るから、曆面上の位置と真の位置とが一致する年代を以て、木星紀年法制定の基礎を為す所の観測が行われた年代と推定し得るからである。此の方針によつて計算を行えば、冬至点の測定された年代は、西紀前四百年附近となり、朔と冬至との実測された年代は B.C. 427-352 の七十六

年間の中となり、木星の運行の観測された年代は、大体 B.C. 330-246 (訂正 B.C. 366-222) の間に含まれるものとなるのである。

五星と五行 陰陽五行説と暦法とは五星を仲介として相提携して居る。宇宙生成論によれば、木火土金水の五行の精は即ち天上の五星であるから、五行説及び歲月日時を通じて五行の流行する状態を指示する所の十干十二支は五星の運行の重く注意された時代の雰囲気の中に於て成立した筈であり、特に十二支即ち十二辰は木星の反映なる太陰の神の運行する順序を指示する様になつて居るものであるから、それは木星週期の決定されて、それに太陰の考案が施された時の産物でなければならぬ。然るときは五行説及び干支の成立は、大体 B.C. 330 (訂正 B.C. 366) 以後のこととなるのである。支那の暦法乃至占星術には五行と干支が伴つて居るから、其の完全に成立した年代は即ち大約西紀前三三〇 (訂正三六六) 以後でなければならぬ。

孟軻と鄒衍 此の年代は大体孟軻もうかの時代と並ぶもので、此の時代に於て占星術的知識を宣伝した学者は孟軻より後れて名を著したところの鄒衍すうえんである。これは談天衍と称せられて居る人であつて、史記の孟子荀卿列伝には其事蹟と學説とが可なり詳細に記述してある。単に此の列伝を見ただけでも陰陽五行説は此の人の潤色が大に加わつて居るであらうと想像される程である。それに上來陳述した計算から得た結果を綜合すれば、支那占星術を大成したのは殆ど此の人であつたと推定しても甚だしい誤は無いことと考えられる。

西方の占星術 そこで更に眼を遠く西方に馳せて、バビロン希臘ギリシャの占星術を見れば、それが希臘に行われ始めたのは、アリストテレス、クセノクラテスの頃からである。此の頃はアレキサンドル大帝の東方経略と相前後して居り、希臘と東方文明諸国との交通は密接であつて、希臘の学者は大抵エジプトに渡つて深い研

究をするのであり、エジプトとバビロンとは共にペルシヤ大帝国の領土として久しい間親密なる関係を有して居たのであるから、希臘の占星術の本となる占星術がバビロンで組織されたのは、それより余り遠からぬ以前であつたことと思われる。此の占星術は「カルデアの智識」と称せられて居るもので、日月五星の運行と人事の吉凶との関係を密に結合させて居ることは支那の占星術と同様であつて、大に五行説に似て居る所があり、種々なる点に於て多くの類似を保つて居る。支那の古曆法は丁度即ちアレキサンドル大帝がペルシヤを征服した翌年を其の第一年として数え起して居る所の、希臘の学者カリポスが考案した曆法と同一の週期を用いて居るものである。カリポスは其の師の説を受継いで、それに多少の創意を加え、B.C. 334の頃アテネへ赴いてアリストテレスの意見を求めたということである。自分が計算によつて推定する所ではカリポス曆の本とする実測の年代もまた支那の古曆と同じくB.C. 427-352の七十六年間の中であつたのである。木星其他の五星の週期についても、バビロンの発掘物の中にはセリユーコスセリユーコスの紀元元年即ちB.C. 312から始めて年々の位置を記したタブレットがある。それには木星の週期を十二年より稍短くしてあつて殆ど真数に近いが、其れより後の羅馬ローマのシムプリシウスの書にはやはり支那と同じく十二年としてあり、又印度に伝わつて居る一種の木星紀年法でも十二年として居る。又希臘の十二宮の智識もバビロンに本づいて居るのであるが、それが春分点に取つてあるAriesの初点を α Arietisに置いて、それから九十度西の方の星を取つてそれを冬至点とすれば、そこには牽牛の初点に当るところの β Capricorniが有る。木星は又支那と同じく希臘でもバビロンでも皆最高の神と結合してある。希臘の木星の神はZeusであり、バビロンのそれはMardukである。此の時代に葱嶺スウーレの東西が全く隔離した別の世界であつて、文化の系統が全く異なつて居たものとすれば、其

の間に於ける偶然の一致が此の如き点にまで進んで居るといふことは殆ど奇蹟以上のものである。

古代に於ける東西の交通　そこで東西の交通状態が此の時代に於ては如何なるものであつたかを考える必要が起る。ヘロドトスの歴史によれば、西紀前七世紀の頃にアリストアスは東方遙にイツセドネの地まで来て居る。それは大略今の支那の新彊省に当る。或は甘肅省の西部に及んで居たかも知れぬ。又西紀前四百年にペルシヤの朝廷に来て居た希臘人のクテシアスはセレスの国に関する記事を残して居る。セレスの国とは支那のことである。アレキサンドル大帝に仕えた將軍のネアルコスは印度に攻入つて、セレスの絹が印度河の上流方面から輸入されることを知つた。ペルシヤ帝国の領地の東端は今のタシユクルガンの地方で、即ち葱嶺そうれいの山中の一地点であり、南は印度、東はコータン、北はカシユガルに通ずる要衝に當つて居る。アレキサンドルの部下の將軍の中には定めて此の地まで来たものもあるであろう。葱嶺の西のバクトリアは希臘の東方経略の策源地である。アレキサンドルは印度河の東へ渡つて、印度征服に力を注いだ。アレキサンドルの歿後印度に起つたチャンドラグプタ王は希臘から学者や美女を招いた。希臘の学者のメガステネスは西紀前三百年の頃に数年間マガダの都に滞在して居て、印度に関する大著述を成した。此の様な時代であるから、西紀前三三〇以後の支那は西方と没交渉では居られなかつたと推測される。して見れば、殆ど奇蹟的な類似を保つて居る東西の占星術暦法の間には必ず一脈の血液が流通して居たことと推定するも決して不穩当なことではあるまいと思ふ。

後世に於ける東西文化の交渉　これを後世の事実から見れば、漢代以来西方の學術宗教は常に支那に刺戟を与えて居る。特に暦法の大改正の根柢は主として西方の智識に待つたので、支那人自身の改正はただ表面

的のもの細目的のものみに止まつて居た。南北朝の暦法、唐代の暦法は印度の暦法の影響を受け、元の暦法は回々曆ふいふいを参酌し、明末から清へかけての暦法は耶蘇教やその僧侶の力を蒙つて居るのである。然るときは上古に於てのみ支那固有の暦法が成立して居て、それが同一時代に種々の同一の事柄を、東西何等の交渉なく、各自単独に發明したものであるということは、到底承認することが出来ない。支那上代の文化を闡明する為にはまた古代文明諸国の文化を顧みることが最も必要となつて来たのである。

古代の文献著作の真年代　支那の占星術が西方學術の影響を受けて其の組織を完成したのは西紀前三百年附近即ち戦国時代の中頃のこと、孟軻や鄒衍の活動した時代であつたとすれば、此の完成した占星術の内容即ち五行や干支や七十六年週期の暦法等を含んで居る古代の書籍は皆此の時代以後に於て現今の体裁に出来上つたものと考えねばならぬ。そして占星術の応用によつて作られた上古史の年代も、また孟軻、鄒衍の頃から漸次に現われて来たのであろう。「孟子」の書は孟軻が晩年に弟子等と問答したものを自ら記したものであるとも言われ、又孟軻の歿後に弟子等が編輯したものであるとも言われて居るもので、其の中には弟子等が孟軻の言に託して述べて置いたものも含まれて居るのであろうと思われ、上古の年代に關しては次の如き記載が存在して居る。

孟子曰、由堯舜二至於湯一、五百有余歲。若禹こつよう皐陶一、則見而知之。若湯則聞而知之。由湯至於文王二、五百有余歲。若伊尹いんらん萊朱しゆ、則見而知之。若文王二則聞而知之。由文王二至於孔子一、五百有余歲。若太公望散宜生二則見而知之。若孔子二則聞而知之。由孔子二而來至於今一、百有余歲。去聖人之世二、若此其未遠也。近聖人之居一、若此其甚也。然而無有乎爾二。則亦無有乎爾一（盡心下）

これは果して占星術の影響を受けたものか否かは分明でないが、しかし、「孟子」の離婁の篇に見えて居る語によれば、孟軻は冬至の日をば千年を隔てても推算することが出来ると言つて居る人であるから、勿論曆法の智識にも接触して居るのであり、又「荀子」の非十二子篇に記してある所によれば、孟軻は五行を唱えたとかいうことであり、書経は「孟子」の中に引用され、其の書経の本文中には五行も干支も記載されて居るのであるから、茲に引いた上古の年代についても、孟軻自身か又は其の弟子等が其時代の占星術家の説を参考しなかつたとは断言し難い。それ故に此等の年数も未だ^{にわか}遽に信ずることが出来ない。司馬遷が周の中世以前の年代を叙述しなかつたのは実に卓見であつたと言わねばならぬ。(昭和二年一月史学雜誌第三十八卷第一号掲載)

- 底本には、飯島忠夫著『支那古代史と天文学』（恒星社、一九三九〔昭和十四〕年二月）を使用した。
- 読みやすさのために、旧漢字は新漢字に、旧かなは新かなに変更し、適宜振り仮名をつけた。ただし、一部の漢字は旧漢字のままにした。
- PDF化にはL^AT_EX_{2 ϵ} でタイプセッティングを行い、dvipdfmxを使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/sciencelib.html>

「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。